

現場との双方向の取り組みを通じた河道管理読本づくり



河川研究部 流域管理研究官 藤田 光一 環境研究部 河川環境研究室 主任研究官 大沼 克弘
河川研究部 河川研究室 研究官 武内 慶了

(キーワード) 河道管理、河川維持管理計画、現場人材育成

1. 重要視される割に向上が遅い河道管理技術

河道は土砂移動に伴いダイナミックに動く。これに伴い治水・環境両面に関わる機能も大きく変動する。こうした河道を適切に管理することの重要性は随分前から認識されてきた。2007年には国交省河川局より、河川維持管理計画(案)を策定することやその際に用いるべき河川維持管理指針(案)が通達された。しかし、そうした枠組みが充実する一方、現場における河道管理技術の向上は必ずしも順風満帆とは言えず、現場の第一線において河道管理の技術が退行しているとの声もある。

2. 九州河道管理研究会の取り組み

こうした課題の克服のため、国総研は河道変化を踏まえた河道管理手法の研究・提案を行ってきた¹⁾²⁾。九州地方整備局河川部および関係事務所はやはり現場の立場から課題克服に強い意欲を持っていた。そこで両者が河道管理の技術を一緒に磨く作業場として「河道管理研究会」が立ち上がった。研究会は、国総研環境研究部・河川研究部の専門家と、九州の河川に精通した学識者、九州地整河川部および管内14事務所のメンバーからなり(80名超)、2007年3月から現在までに半日以上に及ぶ研究会が9回開催された。

研究会では、国総研がpushすべきと考える研究成果・知見と現場がpullしたい技術のギャップを明確にした。また若手・中堅職員が管理を実践しながら悩んでいることを自ら整理・発表し、国総研メンバーが現場に足りないものを感じとった。

3. 技術的知見と管理実践とのギャップを明確化

その結果、次のようなことが見えてきた。1)河

道変化の起こり方を管理と関連づけてわかりやすく、同時にきちんとした技術情報として解説したものがない。2)管理と言っても技術的難易度の幅が非常に広く、担当者の能力とのミスマッチがしばしば起こり、それが管理を面白くないものと思わせてしまう。3)管理の中でも比較的指標や判断基準が議論しやすいものまでも難しく考えすぎてしまっている→「できるものは着実にやる」ための「普通の道具」の設定とその使い込みが大事。4)河道管理に関わる問題は多様度高く、それら全てを無理に丸めて体系化した情報は使いつらく、しかも面白くない。5)新しい事例が次々出てくるので、それらを追加でき、前に入れた情報を進化させる仕組みを最初から入れる。6)自分が関わった河川の知見には、興味とやる気が湧きやすい。

4. 知見の蓄積・活用を根づかせる実験として

現在、1)~6)の要件や方向性を並び立たせた、現場職員のやる気も引き出せる新しいタイプの読本を作成し、平成22年度から九州地整において試用し、さらなる改良につなげようとしている。これを通じて、複雑で難しいと思われるがちな河道管理に関する知の蓄積・共有化システムの実効性が示されれば、それを広げていくことで河道管理の全国ベースでの質的向上につながると考えている。

【参考文献】

- 1) 河道変化を治水・環境保全の接点においた川づくりの考え方 <http://www.nilim.go.jp/lab/dbg/pdf/200608summer.pdf>
- 2) セグメント2河道を対象とした河道掘削後の戦略的河道管理に関する研究 http://www.nilim.go.jp/lab/dbg/pdf/200906_segment.pdf